

上達への近道

やまだみのる

目次

1	はじめに	2
2	作句態度の基本	2
2.1	自然写生に徹する	2
2.2	吟行で作る	2
2.3	たくさん作ってたくさん捨てる	2
3	季語は俳句の生命	3
3.1	基本季語を覚える	3
3.2	季語のバリエーションを覚える	3
4	選句力を養う(鑑賞力を育てる)	3
4.1	選句力は作句力の裏返し	3
4.2	真剣に選ぶ	3
4.3	直感で選ぶ	4
4.4	秀句を鑑賞する	4
5	吟行の基本姿勢	4
5.1	ひとりで吟行に行くときの注意	4
5.2	仲間と一緒に吟行するときの注意	4
5.3	一箇所で頑張る	5
5.4	まず季語を見つける	5
5.5	始めは大量生産で	5
5.6	調子が出てきたら感性を集中させる	5
6	推敲法について	6
6.1	作りっぱなしは駄目	6
6.2	辞書を活用する	6

7	類想（類句）について	6
7.1	気にしない	6
7.2	潔く捨てる	6
8	継続は力	7
8.1	作句、投句を休まない	7
8.2	不調になったら	7
9	結社に入会する	7
9.1	はじめが大切	7
9.2	結社の選びかた	7
10	更新履歴	8

1 はじめに

作句を始めると誰もが早く上手になりたいと願うものですが、必ずしも励んだ時間に比例して上達するわけではありません。上達の近道があるかどうかはともかく、具体的にそれを意識して励むのと、そうでないのとでは必ず差は出てきます。

このテキストに記したことは、全てわたしが小路紫峽先生（俳誌「ひいらぎ」主宰）に教わったことです。出来るだけわかり易くまとめたつもりですが、わからないところはQ & A 掲示板で質問して下さい。

2 作句態度の基本

2.1 自然写生に徹する

俳句は考えて作るのではなく、実感を詠むのだということは何度も説明してきました。初学のときに考えて作る癖が付くと、後々軌道修正するのはとても難しいのです。聖書のみことばを引用したり人間関係などを題材にしたりとすると、どうしても理屈っぽい作品になりがちです。

ですから初めのうちはそのような題材ではなく自然写生に徹して欲しいのです。自然を凝視して心に響いてきた実感を五・七・五に詠む。これを繰り返しているうちに徐々に感性が磨かれてきます。

2.2 吟行で作る

卓の上の鉢花を詠むのも一応は自然写生ですが、できるだけ戸外に出かけて行って句を作るほうが、感動が得られやすいです。遠出をする必要はなく、散歩でもいいのです。もっと時間がなければ自宅の庭でも良いと思います。吟行での作り方の詳細は後述しますが、とにかく頭の中を無にして心を集中し、自然と向かい合ってください。そして心に響いてきたことを素直な言葉で表現するのです。調子が整わなくても気にしないで、どんどん書き留めていきます。表現方法についてはいくらでも添削でお手伝いできますが、作者の代わりに添削者が感動してあげるということはできないのです。

2.3 たくさん作ってたくさん捨てる

どんどん作って添削掲示板に書き込んで下さい。全ての投稿作品を添削するのではなく、感動が伝わってくる作品のみ必要なら添削します。そうでない作品は添削しません。添削されなかった句は没ということで捨ててください。これを繰り返し訓練していくうちに、自然に句のよし悪しの基準が育ってい

くのです。没になった作品にいつまでも固執する人がいますが、もともと感動のない作品をいくら添削しても佳句にはなりません。

3 季語は俳句の生命

3.1 基本季語を覚える

俳句を初めて一年経つと基本的な季語をほぼ覚えます。そして三年経つと、ようやく本当の季語のもつ味が解ってくるといわれます。つまり季語の種類を覚えることと、その本当の味を知ることとは違うのです。季語の種類を覚えるだけなら季寄せでもいいですが、季語の持つ深い味を知るには例句の載った歳時記の方がいいわけです。季語をたくさん知っているほど句が作りやすく、より具体的に感動を表現できるのです。

3.2 季語のバリエーションを覚える

一つの季語でもいろいろバリエーションがあることはもうおわかりですね。例えば「春」という季語を例に歳時記を見てみましょう。春立つ、春の朝、春浅し、春深し、春宵、春行く、春の空、春の雲、... ただ「春」とだけ言うよりそれぞれ違った意味があり、より具象性があります。出来るだけ具体的な季語を選ぶことが佳句を生む秘訣ですから、いろんな季語のバリエーションを知っていることはとても大切なのです。

4 選句力を養う（鑑賞力を育てる）

4.1 選句力は作句力の裏返し

選句力を養うことは作句力を向上させることに繋がります。高浜虚子先生は「選は創作なり」と申されました。作ることより選ぶ方が簡単だと思いがちですが実際は逆です。まぐれで佳句が生まれることはあってもフロックで良い選をすることはできません。

4.2 真剣に選ぶ

選句するときには、真面目に真剣に選ばなくてははいけません。また披講のときにも、選者や上級者の選と自分の選がどう違うかに気を付けてチェックしておく、後で復習するのに役立ちます。自分の句が選ばれるか否かにしか興味を持たず、真剣に選ぶ姿勢のない人がいますが、これでは上達は望めません。

4.3 直感で選ぶ

俳句は理屈ではなく感性だといいました。感性というのは直感的に感じるもので、あれこれ考えた末に感じるものではありません。はじめは、ことばも知らないし、経験も少ないですから、よく分からない句に出くわしますが、分からないものは考えても分かりません。直感的に理解できて、いいなと思う句を選べばいいのです。インターネット句会ではゆっくり時間をかけられますが、本物の句会では限られた時間内に肅々と清記稿をまわして互選していきます。全体のペースを乱さないように、自分のところで清記用紙が滞らないように配慮することは最低限のマナーです。パッと見て、パッと選ぶ、という訓練をして下さい。ぐずぐず選ぶ癖がつくと、後で直しにくいものです。

4.4 秀句を鑑賞する

選句力を養う一番良い方法は鑑賞力を育てることです。ゴスペル俳句にも秀句鑑賞というページがあるので参考になると思いますし、上級者の鑑賞文を読むことで鑑賞のこつを掴めます。実際に自分で鑑賞して、文章にまとめることは最も良い勉強法なのです。

5 吟行の基本姿勢

5.1 ひとりで吟行に行くときの注意

時間の制約もなくお喋りもしないので集中して作句できます。ただ後で句会がないので、"どうしても作らなければ"という気持ちが湧かず、結局、一句も作れなかったということも多いです。10句出来るまではがんばるといような強い意志を持つことが必要です。

5.2 仲間と一緒に吟行するときの注意

競って作句をするので刺激あって意欲的に作れます。また物知りの先輩に、いろいろ教えて貰えたり質問できたりという便利さもあります。複数で吟行するときは必ず句会をするようにしましょう。たとい二人でも、後で見せあって感想を語り合うことは出来ますし、三人以上なら、締切時間を決めておいて句会を設定しておきます。そうすることで苦しみながらも句を作るようになりますし、何よりも句会は楽しいものです。最も気を付けないといけないのはお喋りし過ぎないことです。勿論、集中して作句している人の邪魔をしてもいけません。

5.3 一箇所で頑張る

あちこち移動しているんな場所を見て回るほうがたくさん句が出来ると思う人が多いですが、必ずしもそうではありません。ここと決めたら、その場所で徹底的にがんばってみることも必要です。要するにここを集中させることが大切なので、次々移動するとそれが出来ません。同じ場所で粘るほうが思わぬ変化や動きを発見できる確率が高くなるのです。これは、わたしの実経験ですから断言できます。見えている表面的な部分だけを観察するのではなく、見えないものを見つける力（心眼）を身につけたいですね。

5.4 まず季語を見つける

吟行での第一句目というのは、なかなか作りにくいものです。ただ漫然と歩いたり眺めていたりしても句は出来ません。まず季語を探しましょう。見つければそこに腰を落ち着けてがんばる。これが吟行の基本姿勢です。前日に吟行地の情報、どんな花が咲いているとかどんな施設があるかなどを、予習していくのも大事なことです。小型の季寄せは吟行の必携品です。

5.5 始めは大量生産で

まずは何でも良いから一句作ってみましょう。最初から良い句を作ろうと構えるとなかなか一句が生まれません。何も考えずにどんどん作っているうちに調子が出てきます。同じような句ができて構わず、どんどん句帳に書いていきましょう。あとで推敲するときに5番の句と9番の句を組み合わせるといい句になった、ということも多いのです。

5.6 調子が出てきたら感性を集中させる

一箇所で我慢して粘っていると、徐々に調子が出てきます。さらに観察力を集中させてください。集中させるコツは、俗事的なことを全て忘れて無我の状態になることです。仕事のこと、家族のことなど気になるようなことは全部払拭して、ここを集中させるのです。これが上手にできるようになると、俳句はよい気分転換になってストレス解消に役立ちます。

6 推敲法について

6.1 作りっぱなしは駄目

吟行で作った作品を作りっ放しにしてはいけません。かならず推敲する習慣をつけましょう。うっかり無季（季語がない）になっていることもありますし、季語が二つ以上あるのもいけません。自分には分かって、他人が見ると何の事か分からないような表現になっていることもあります。時間を置いて、見直すことでそれに気づくことは多いのです。必ず推敲する習慣をつけましょう。

6.2 辞書を活用する

漢字のわからなかったものは辞典を引いて直しておきましょう。曖昧なことばを使ったと思ったら、国語辞典で確かめましょう。また、他にもっと適切なことばが無いかを調べるのも大切です。類語辞典が一冊あると推敲には重宝します。

7 類想（類句）について

7.1 気にしない

少し経験を積んでくると「その句はわたしが先に作っている！」などよく騒ぐ人がいますが、気にしないことです。同じ情景を観察していると、他の人とよく似た類句や類想が生まれるのは当然です。また不思議なように素直に一句が生まれることがあり、これは、誰かの句集が歳時記などで見た句ではないかと、自分を疑うようなこともあります。初学のうちはあまり気にしないほうが良いです。必要以上にこれを気にしだすと句が作れなくなります。

7.2 潔く捨てる

意図的に類句を作って投句することは論外ですが、そうと知らずに投句してしまうことは特に恥ずかしいことでも、悪いことでもありません。ただ、類句も類想も発覚したときには潔く捨てましょう。”どちらが先に作ったか”などと論争するのは見苦しいものです。類想句として議論するような句は、たいてい平凡な駄作が多いものです。つまらない類句論争をするよりも、類想のない個性的な感性を育てるこのほうが大切なことです。

8 継続は力

8.1 作句、投句を休まない

忙しいからとか、どうも調子が出ないからという理由で作句や投句を休んではいけません。一日でも休むとそれだけ感性は退化すると思わなければいけません。どんなに忙しくても十分くらいの時間は取れるでしょう。一日一句を心がければ月に三十句は作れるはずですよ。

8.2 不調になったら

感性が鈍ってくるとつい頭で考えて作るようになり不調に陥ります。そんな時は少し作句を離れて、先生の句集とか、結社の選集（入選作品の中からさらに厳選してまとめられた作品集）などを読みましょ。良い作品を読むことで鈍った感性を呼び戻すのです。

9 結社に入会する

9.1 はじめが大切

俳句上達の最も近道は、なんと言ってもこれに尽きます。”少し上達してから ”と考える人もいますが私は反対です。独学で上達することは難しく、一度変な癖がつくと直らないからです。早い段階から専門の先生の指導を受けることはとても重要なことなのです。ただし、半端な気持ちで結社に入会してはいけません。句会に参加できないとか、投句もしたりしなかったりというようでは、入会する意味もありませんし、当然、上達も望めません。

また結社では半年分とか一年分とか一定の誌代を前納しなければいけません。句会に出席するときにも参加費が必要です。必要な経費以外に指導して下さる先生に対する謝礼が含まれる場合もありますから、意外と高額なケースもあります。情報は大抵事前に知らされますから納得して参加ましょ。

そのほかさまざまなお付き合いも生じてきます。このあたりは俳句に限ったことではありませんがある程度の覚悟は必要です。いずれにしても常識として、”無料で教えてくれる優秀な学習塾は無い ”ということを十分理解しておく必要があるでしょう。

9.2 結社の選びかた

結社の選びかたにベストという方法はありません。その人の作風や住んでいる地域などにも関連するので、どの結社が良いかということは、一概に言えないのです。俳句入門小講座の中で、わたしのケースの例を書いています

ので、参考にして下さい。もし、よくわからなかったり、決断がつかなかったりしたときは、メールで相談してくだされば私にわかる範囲でお答えします。

10 更新履歴

- 2001年3月17日、PDF版を公開
- 2001年1月6日、書式を変更、一部追稿、フィードバックを追加
- 1999年5月10日、公開。